



日本王代一覽

三

以伊 5  
1088  
3





門伊5  
第1088  
卷3



日本王代一覽卷之三目錄

一葉  
四清和天皇

在位十八年

貞觀十八  
森鴻次郎  
氏寄贈

六葉  
四陽成天皇

在位八年

元慶八

十葉  
五光孝天皇

在位三年

仁和三

十四葉  
五宇多天皇

在位十年

自仁和四至寬  
平九

十八葉  
六醍醐天皇

在位卅三年

昌泰三。延喜卅  
二。延長八。

廿四葉  
六朱雀院

在位十六年

承平七。  
天慶九。

廿七葉  
六村上天皇

在位廿一年

天曆十。天德四。  
應和三。康保四。

廿九葉  
六冷泉院

在位二年

安和二。

卅九葉  
六圓融院

在位十五年

天祿三。天延三。  
貞元二。天元五。

日本王代一覽卷之三目錄



花山院

在位二年

寬和二。

一條院

在位廿五年

末延二。未祚一。  
正曆五。長德四。  
長保五。寬弘八。

三條院

在位五年

長和五。

後一條院

在位廿年

寬仁四。治安三。  
萬壽四。長元九。

後朱雀院

在位九年

長曆二。長久四。  
寬德二。

後冷泉院

在位廿三年

末承七。天喜五。  
康平七。治曆四。

日本玉代一覽卷之三

五十六代

清和天皇

文德天皇ノ太子ナリ。御諱ハ惟仁母。漆

殿后藤原明子ナリ。太政大臣良房ノ娘ナリ。生ニ九月

ニ。太子ニ立ツ。天安二年八月文德崩ス。十一月太子九

歳ニテ即位シ給フ。外祖良房攝政ス。是藤原氏攝政

ノ始ナリ。日本ニテ幼少ニテ帝位ニ即ク。ハ是天皇ヲ始

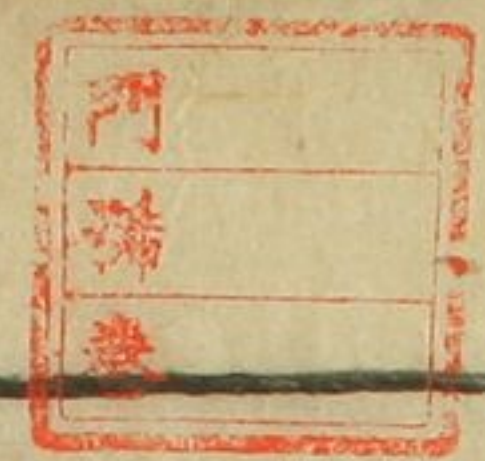
トス。伊勢方大神宮并ニ諸ノ山陵ニ即位ノ由ヲ告ラル

外祖母源繁姫ニ正一位ヲ贈フル。此ハ嵯峨ノ娘ニテ良

房ノ室。漆殿ノ后ノ母也。今年智證唐ヨリ歸朝ス

貞觀元年正月。年始ノ節會等。諒闇ノ内ナレ。皆コレ

ヲ止ラル。二月。大和ノ三輪明神等ニ正一位ヲ授ラル。





其外諸國ノ諸社ニ神位ヲ多ク授ラル右大臣藤原良相崇親院ヲ建テ藤原氏ノ宅ナキ者ヲ居シメ延命院ヲ建テ藤原氏ノ病アル者ヲ居シム 三月和氣尋範ヲ勅使トシテ宇佐八幡へ即位ノ旨ヲ申サレ帝王一代ニ一度ヅ宇佐へ勅使ヲ立ラル每度和氣氏ニ命ゼラル清麻呂カ先例ナルヘシ 四月攝津國ノ中ニテ遊獵ノ地ヲ左大臣源信ニ賜ル 同日賀茂ノ祭左右近衛府左右衛門府左右兵衛府ヲシテ警固セシム 五月渤海使者烏孝慎カ船加賀ノ國ヘツク安倍清行ヲ加賀國ヘ遣サレ其書簡ヲ受取テ都ヘ捧ケ勅書ヲ賜テ都ヘ入ニ及バス直ニ歸國セシム 七月賀茂松尾平野大原野ニ輪春日住吉氣比日前等ノ社ヘ

雜使ヲ遣サレ 十一月大嘗會ヲ行ル其儀式備シル此年僧行教宇佐へ參詣八幡太神王城へ來テ寶祿ヲ守ルヘトノ詔宣アルヨシ矣聞シ始テ山城國男山石清水ニ官ヲ建テ崇ラル 二年正月大學博士春日雄繼孝經ヲ天皇ニ授奉ルヨリ後帝王ノ讀書始ハ大方孝經ヲ用ラル 三年二月太政大臣良房ノ館ニ行幸百官皆供奉良房ノ家人等皆位ヲ授ラル 三月東大寺ノ大佛ノ修理成就スルニヨリテ供養行ル 五月渤海使者船出雲國ニツク禮法タカコトアルニヨリテコレヨリ追返サレ 六月前殿ニテ童相撲ヲ御覽セラハ 八月天皇論語ヲ讀春日雄繼侍講



四年三月。在原業平從五位上ニ叙ス。平城天皇ノ  
孫阿保親王ノ子ナリ

五年正月。大納言右大將源定卒。嵯峨上皇ノ  
愛子ナリ。同月ニ其兄大納言源弘卒。是ハ學問ヲ  
好シ。筆法ニ達シ。管絃ヲ好リ。五月神泉苑ニテ。  
崇道天皇伊豫親王藤原夫人吉子。櫛逸勢。文室  
宮田麻呂等ガ怨靈ヲ祭ル。是ヲ御靈會ト云。近年  
打續疫病ハヤリ。此年ノ春ヨリ殊ニ甚クテ。人多死ル。  
ヨリテ。此等ノ怨靈ノ所爲カト申者アルニヨリテ。此  
祭ヲ行ル。十月良房ヲ召テ宴ヲ賜リ。六十ノ  
賀ヲ行ル。此年良房奉テ春澄善繩ヲシテ。續日本  
後紀ヲ作ラシム

六年正月元日。天皇元服シタマフ。御歳十五。藤原  
氏重兒十二人同時ニ元服ス。二月。良房ノ館へ  
行幸。花ヲ御覽ニ御遊。又射場ニテ。天皇自ラ御弓  
ヲ射タニヒテ。的ニアテタマフ。又山城守紀今守ニ命  
ジテ。農民ヲ召連來テ。田ヲ耕ス。体ヲ御覽ニ備ラ  
ル。民ノ艱苦ヲシロシメスヤウニトシテ。事ナレヘシ  
五月。富士山燃テ。十日餘。火消ス。山上ノ磐石崩  
テ。海ヲ埋コト。二十里ハカリ。人家モ多クツル。始ハ  
淺間ノ方ヨリ燃出テ。後ニ八甲斐ノ國ノ方ヘ燒移ル。  
七年四月。和氣縣。龍ヲ勅使トシテ。石清水ノ八幡へ。  
楯帚鞍等ヲ奉納セラレ。八月。米百石。豆百石ヲ  
對馬嶋ニ賜テ。銀穴ヲ掘シ。霖雨ニヨリテ。其穴ノ道



塞ルユヘナリ

八年二月右大臣良相カ

百花亭へ行幸

閏二月朔日良房館へ行幸。様々

ノ御遊アリ

同月十日夜。應天門焼亡ス。放火ナル

ヘキカト沙汰アレトモ。火災ノコルユヘヲ知ズ。此比ハ良

房ハ折々出仕シ。政ヲ良相ニ任ゼラル。此時大納言伴

善男ト云者アリ。大臣ニ望アレトモ。其闕ナキユヘニ。左

大臣源信ヲ退ケハ良相左大臣トナリ。已右大臣トナ

ルヘト思テ。應天門ノ焼タル左大臣ノ所爲ナリト訴フ。

良相是ヲ信シ。善男ト同道シ。陣座へ出テ。參議中將

基經ヲ呼テ。左大臣逆心アリテ。應天門ヲ焼タリ。急

ギ行向テ。糾明セヨト云。基經聞テ。太政大臣ハ此事

シリタリヤト問。良相。此比ハ太政大臣專ラ佛法ヲ信

ジテ。政ニカマハス。故ニイマタ此事ヲ知スト云。基經

己ハ天下ノ大事ナリ。太政大臣ノ下知ナクハ。兼

引シカタレトテ。即千使ヲ以テ良房ニ告。良房

大ニ驚テ曰ク。先帝時。今上太子タリシ時。此人ノ

カニヨリテ。御位サタレリ。然レハ左大臣ハ功臣ナ

リ。何ノ罪カア。フシ。左大臣罪ニアハ。良房先誅セラレ

ヘシト奏セララル。ヨレニヨリテ。左大臣無事ナリカクテ

八月三日。大宅鷹取ト云モノアリ。應天門ハ善男父

子。夜中竊ニ行テ。火ヲツケテ焼テ。却テ左大臣ノ

所爲ナリト奏スルヨレ。訴ケレハ。參議南淵年名。藤

原良繩奉テ。糾明シケレハ。紛シナク善男カ所爲ニ

究ル。死罪ニ行ルベケレトモ。一等ヲ減シテ。伊豆國へ



流サル其子共同類皆流罪セラル基經ハ良相ノ  
養子ナリ後ニ昭宣公ト申セシ人ナリ 七月染  
殿太后病氣敷山相應祈テ驗アルニヨリ傳教慈  
覺共ニ大師ノ謚ヲタマハル相應ハ慈覺カ弟子ナ  
リ慈覺ハ貞觀六年ニ寂セリ

九年十月右大臣良相薨ス

十年十二月左大臣源信薨ス學問書畫管絃馬  
鷹ノコトニテニ達タル人ナリ

十一年四月大納言藤原氏宗并ニ參議大江音  
人刑部卿菅原是善等奉テ貞觀格ヲ撰テ奉ル  
音人毛博學ノ人ナリ菅家江家ト相並テ代ト  
儒宗タリ 五月奥州大地震死者千餘人

六月新羅海賊博多へ來テ豊前國ノ工員船ヲ擄  
ス大宰府ヨリ兵ヲ出是ヲ捕ントス賊船早々逃歸  
十二年正月藤原氏宗右大臣トナル源融藤原基  
經大納言トナル融ハ嵯峨天皇ノ子ナリ

十三年二月天皇紫宸殿へ出御アリテ於テ自ラ  
政ヲ聽タラフ仁明天皇ヨリ以前ハ主上毎日紫宸  
殿へ出御アリ文德ノ代ヨリ以後此儀ナシ今又舊  
禮ニカヘル人皆悅フ 四月良房ニ食禄ヲ加ヘ隨身  
兵仗ヲタマハリ三宮ニ准ゼラル准三宮是ヨリ始

八月右大臣氏宗奉テ貞觀式ヲ撰タテマツル  
九月五條ノ后藤原順子崩ス仁明ノ后文德ノ  
母ナリ 十二月渤海國ノ使者楊成規等加賀



國ニ若岸ス

十四年正月、山内記菅原道真等ヲレテ、渤海ノ使  
者ヲ揆撥セシム。道真ハ菅原丞相トナリ。二月、右大臣  
藤原氏宗薨ス。三月、良房疾アリ、錢五十萬ヲ賜テ、  
柝禱ノ料トス。八度者八十人ヲタマフ。僧正眞雅、法  
務ニ任ス。五月、渤海ノ使者、京ニ入。鴻臚館ニ居レ  
ル。宴ヲ賜フ。在京ノ間、在原業平等勅使トシテ、行  
テ、勞カス。其外文人等、行向テ參會ス。都良香モ其  
揆撥ヲナス。良香ハ博學ノ人ナリ。其後、使者勅書  
ヲ賜リ、參内ニ及ズ。鴻臚館ヨリ歸國。鴻臚館ハ、玄  
蕃寮ナリ。異國人ヲ置所ナリ。東寺羅城門ノ邊ニ  
アリ。八月、源融、左大臣トナル。藤原基經、右大臣

トナル。九月二日、大政大臣從一位藤原良房薨ス。  
年六十九。正一位ヲ贈リ、美濃公ニ封ジ。忠仁公ト  
謚ス。源融ト基經ト、左右大臣ニテ、政ヲ執トイヘ  
トモ、威權專ラ基經ニアリ。  
十六年二月、新二道場ヲ建テ、貞觀寺ト號ス。大  
齋會ヲ設テ、四月、淳和院燒亡。其火飛テ、内裏  
ヘ至ル。基經等、急ニ參テ、火ヲ防シメテ、早クニツミル。淳  
和院ハ淳和天皇位ヲスヘリテ、後ヲハセシ所ナリ。  
十七年正月、冷然院燒亡。是ハ嵯峨天皇ノ隱居所  
ナリ。納置ル文書、其外財寶皆滅ス。大原雄廣ト云  
者、火ヲ防テ、燒死ス。四月、天皇五經史記、群書治  
要ヲ讀管原是善、菅野佐世、大江音人等、授奉ル



十八年四月十日大極殿其外殿門多ク焼亡ス  
放火ノ疑アルニヨリテ勇士ヲシテ洛中ヲ巡檢セ  
シム 五月伊勢并賀茂松尾ノ社へ勅使ヲ遣  
レ大極殿焼亡ノ事ヲ申サル 七月大極殿ヲ作  
十一月天皇位ヲ第一ノ皇子貞明親王ニ讓ル右  
大臣基經ヲシテ攝政セシムルコト忠仁公ノ例ノ  
コトシ 十二月清和ニ太上天皇ノ尊号ヲ奉ル  
後ニ水尾山ニ入タマフニヨリテ水尾帝トモ申ス年  
号貞觀在位十八年

五十七代

陽成天皇 清和ノ太子ナリ諱ハ貞明母ハ皇太后  
藤原高子ト云故中納言長良ノ娘ニテ右大臣

基經ノ妹ナリ世ニ二條后ト云ハ是ナリ此帝貞  
觀十年ニ生レテ同十一年ニ太子トナリ十八年十  
一月清和位ヲ讓ル明ル元慶元年正月二日天皇  
即位大極殿イマタ造サレヨリテ豊樂殿ニテ行  
ルワヅカ御年八歳ナレハ基經攝政外祖藤原長  
良ニ左大臣正一位ヲ贈フル 二月渤海ノ使來ル出  
雲國ヨリコレヲ歸ス 六月旱シテ久雨降ス伊  
勢八幡賀茂等諸社ヘコレヲ禱ル 十一月大嘗  
會 十二月元慶寺ヲ造ル  
二年二月善洲愛成ヲシテ日本紀ヲ讀シム 三月  
出羽國ノ夷賊千餘人起テ秋田城ヲ燒破國司  
藤原興世是ヲ防テ敗軍シ五百餘人討ル由



注進ス 四月又賊ト戰テ官軍敗レカハ 五月藤原保則ヲ出羽へ遣サレ近國ノ兵ヲモヨホシテ伐シム 六月小野春風ヲ鎮守府將軍トシニ奥州へ遣シ兵ヲ催シム又東海道ノ國々ヨリモ加勢ヲヤラシム 七月保則出羽ニ到リ賊ヲ討テ小利ヲ得タリシカレトモ賊津輕等ノ地ニ猶充満ス 九月關東國々大地震

三年正月出羽ノ夷賊降參シ中無事ノ由注進ス 五月清和太上天皇落飾 十月大極殿成就ス 饗宴ヲ行ル

四年三月太上天皇山城大和津ノ名山佛閣ヲ見巡テ丹波水尾寺へ入りタマヒ意ヲ佛法ニカケ

テ頭陀ノ行ヲシタヒタミ 五月左中將在原業平卒ス 歲五十六倭歌達者好色ノ人ナリ 十一月八日右大臣基經攝政ヲ止テ關白トナル 是關白ノ始ナリ 此月ノ末ヨリ太上天皇不例 十二月四日基經太政大臣ニ任ス 良房基經父子相續シ攝關相國タリシヨリ朝廷ノ權柄皆藤原氏ニ歸ス 太上天皇崩ス 歲三十一 様々ノ追善アリ 六年正月二日天皇元服 基經加冠タリ 大納言源多理髮タリ 其儀式嚴重ナリ 源多右大臣トナル 藤原良世藤原冬緒大納言タリ 在原行平源能有中納言トナル 二月基經准三宮隨身兵仗ヲ賜ル



七年正月渤海使者裴璵等加賀國へ來ル勅ニヨ  
リテ。四月京へ來リ。鴻臚館ニ入。管丞相此時ハ文  
章博士タリシガ。假ニ治部大輔トナリテ。渤海ノ  
使者ヲ挨拶ス。治部ハ異國ノコトヲ掌ル官ナリ裴  
璵文才アリ。管丞相ト詩ノ贈答アリ。五月裴  
璵等ヲ内裏へ召シテ。御餐宴ヲ賜ヒ又馬ニ乗セ。弓  
ヲ射ルヲ見セシム。其後飯國。十一月天皇馬ニ  
乗コトヲ好テ。内裏ニテ馬ヲ飼シメ。常ニ驅騎賤  
者ヲチカツテタマヒテ。作法アレキコト多カリケレ  
ハ。基經是ヲ聞テ參内ニ近習ノ小人小野清和等  
ヲ遣出ス。其後天皇モノクルハシクナリタマヒテ。或  
時ハ蛙ヲ聚テ蛇ニ吞シメ。或時ハ猿ト犬トヲ闘シ  
メテ。タハムレヲナス。罪トキ者ヲ殺シ。氣ニ違者ア  
レハ。自ラ寶劔ヲ拔テ追奔リタマフ。基經諫レト  
モ兼引ナシ。

八年正月天皇惡逆弥甚シ。基經參内ニ窺へハ。  
人ヲ樹ヘシホラシメ。ヒヨリ是ヲ突殺シテ笑樂ム。  
基經カクテハ帝位アヤウシト思ヒ。近ク參テ。御  
徒然ニ見ヘ侍リヌレハ。競馬ノ遊ヲ催ヘシ。行幸御  
覽アルベシト奏ス。天皇悅ム。自限ヲ約ス。二月  
四日御車ニノミテ出御アリ。基經内裏ノ門トニ  
番ヲスヘ。堅ク守シメ。御車ヲ二條陽成院ト云所へ  
ヤリテ。奏聞シ。御狂病ナシ。帝位ニミシ。サンヨト叶  
ヘカラス。故ニ御位ヲスヘラセ申スナリト云ハ天皇



涙ヲ流シ悲トモカイナシ。即チ太上天皇ノ尊  
号ヲ奉ル。時年十七。此時基經威權甚強。群  
臣皆畏ルレカレトモ左大臣源融獨此事如何アル  
ヘキト思案ノ體ナリ。藤原諸葛十云者劔ニ手ヲ  
カケ。誰カ太政大臣ノ仰ニ背ンヤト云融默然夕  
リヨレニヨリテ。異儀ニス。トナン。或説ニハ融モ皇子  
ナルユヘ即位ノ望アレトモ。既ニ人臣ニ列スルユヘ基  
經許容セズ。又一説ニハ天皇多病ニヨリテ。宸筆ノ  
勅書ヲ基經ニタハリテ。位ヲ辭退ニタス。ト云リ  
是ハ朝廷ヲハカリテ。天皇ノ惡ヲ諱カクレタルベ  
シ。天皇在位八年。年號元慶

五十八代

光孝天皇 仁明第三ノ子ナリ。諱ハ時康。文德清  
和陽成ノ二代ヲ歷テ。一品式部卿親王ト号ス。  
陽成位ヲスベリテ基經ノハカラヒニテ思ノ外ニ  
元慶八年二月二十三日即位。時歲五十五。基  
經關白タリ。三月外祖藤原總繼ニ止一位ヲ  
贈ル。四月天皇始テ文選ヲ讀。橘廣相侍  
讀タリ。五月左大臣源融勅ヲ奉テ。管丞相  
時文章善洲永貞大藏善行等ノ博士等ヲ召  
テ。太政大臣ノ官ハ天子ノ師範ナレハ職掌アルヘ  
カラサルカ。但三公ノ第一ナレハ天下ノ政ヲ知ヘキ  
カト尋ラル博士等各申旨アリ。此時基經ノ  
威サカンナレハ太政大臣職掌ナレト云テ。其威



ヲヘサントノコトナルヘキカ。然トモ萬機ノ政ニツ基經ニ申。後奏聞ス。十一月。大嘗會行ル。

仁和元年正月。攝津ノ内ニテ。遊獵ノ地ヲ基經ニ賜ル。四月。基經五十筭ヲ賀シタマフ。八月。神泉苑ニ行幸。魚ヲ釣。又馬ヲ御覽アリ。

十一月。僧正遍昭ヲ召テ。其七十筭ヲ賀シタマフ。二年。正月。基經嫡男時平十六歳内裏ニツイテ元服。天皇御手ヅカラ加冠シタマフ。基經様々ノ物ヲ獻シテ謝シ奉ル。八月丁未。釋奠例ノゴトシ。博士周易ヲ講ス。基經來テ孔子ヲ拜ス。十二月十四日。芥川野へ行幸。鷹狩ニタマフ。天皇遊獵ヲ好テ。屢出御アリ。

三年。四月。伊勢方石清水ト吉笠等ヘ奉幣使ヲ立ラル。五月。山城國大原野ヲ陽成太上天皇ヘ一ラセテ。遊獵ノ地トス。八月内裏ニ様々ノ怪異アリ。此月二十六日。天皇崩ス。歳五十八是ヨリ

ナキ。平城嵯峨淳和詩文ヲ作コトヲ好ム故ニ其比ハ文才ノ臣ヲシ。此天皇倭歌ヲ好ムユヘ是ヨリ世人皆倭歌ニ志スヲ以テ要トス。在位二年。

年号仁和  
五十九代

宇多天皇 光孝ノ第三ノ子ナリ。諱ハ定省。母ハ皇后班子仲野親王ノ娘ナリ。光孝即位セサル時御子達ニ戲テ。我若帝位ニ昇ラハ汝等何

ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。

ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。

ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。

ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。

ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。光孝曰。我若帝位ニ昇ラハ汝等何ナリト云フ。



ノ望カアルト云。太郎是忠ハ。筑紫ヲ賜フント云。次  
卽是貞ハ東海道ヲ賜レト云。二卽定省ハ東宮ニ  
立ント云。其後光孝即位。定省侍從ニ任ズ。光孝ノ  
病中。基經等カス、メニヨリテ。定省ヲ太子トス。  
程十ク光孝崩ス。基經太子ヲ大極殿へ誘引シ。  
即位セシム。御歳二十一。時、仁和三年十一月十七  
日ナリ。基經上表シテ。政ヲ復ス。天皇我々今孤々  
リ。若輔佐トナリテ。政ヲ聽ス。ハ我位ヲスヘリ。石  
山林ニ入ント宣フ。コレニヨリテ。又基經關白タリ。

仁和四年四月。讚岐國早ス。國司菅丞相雨ヲ當  
國城山ノ神ニ禱ル。八月。仁和寺ヲ造ル。高野山  
ノ僧真然ヲ導師トシテ。供養ヲ行ル。真然ハ弘

法ノ弟子ナリ。九月。畫工巨勢金岡ニ命シテ

御所ノ南。庇東西障子ニ畫ヲカ、ム。十月。右

大臣源多兼死ス。歳五十九。是ハ仁明ノ子ナリ。

十一月。大嘗會行ル。

寛平元年正月元日。四方拜アリ。是ヨリ毎年カ

クノゴトシ。大納言藤原良世。左大將トナル。中納

言源能有右大將トナル。良世ハ良房弟ナリ。能

有ハ文德ノ子ナリ。五月。高望王ニ平姓ヲ賜

ル。桓武ノ曾孫。葛原親王ノ孫。高見王カ子ナリ。

清盛并北條カ先祖ナリ。十月。陽成太上天皇在

病發テ。琴絃ヲ以テ。女人ヲヒハリテ。水ノ中ニ漬

ク。又或時馬ニ乘テ。驅出テ。人ヲ追アリク。或時ハ



官人ノ宅ニ亂入。或ハ山ニ入テ猪鹿ヲ狩。十一  
月始テ賀茂臨時祭ヲ行ル。天皇イニ夕侍從タリ  
シ時即位シタニフヘキ旨ヲ。此神ニ兼テ止ロフルユ  
ヘナリ。同月基經ニ腰輿ニ乘テ。宮中ニ出入スル  
コトヲ許シ。源融ニハ輦ニ乘コトヲ許サル  
二年正月十五日。七種ノ粥ヲ獻スルコトヲ。恒例ト  
定ラル。十一月基經病アリ。天皇行幸アリテ慰勞  
セラル。三井寺智證來テ加持ス  
三年正月十三日。關白太政大臣藤原基經薨死ス。  
年五十六。正一位ヲ贈ラシ。越前公ニ封シ。昭宣公ト  
謚ス。二月大納言藤原良世右大臣トナル。昭宣  
ハムノ嫡男時平參議ニ任ス。十月智證寂ス。三井

寺ノ開山ナリ

四年五月時平檢非違使別當トナル。菅丞相ニ  
勅シテ。類聚國史ヲ作シム。  
五年二月時平中納言ニ任シ。右大將ヲ兼。菅丞相  
參議ニ任ス。菅丞相ハ家業ヲ繼テ。博學文才殊ニ  
ス。クシケル故ニ。天皇是ヲ登庸セララル。七月。中納言  
在原行平卒ス。歳七十五  
六年八月。菅丞相ヲ遣唐大使トシ。紀長谷雄ヲ  
副使トセララル。其才ヲエラシメ。此官ヲ授ラルトイヘ  
トモ。此比大唐亂國トナリケルユヘカ。入唐ノ沙汰ナ  
シ。長谷雄モ漢書文選。其外群書ヲ讀テ。大才ノ  
人ナリ。九月新羅ノ賊船五十艘許。對馬國へ來。



太宰府ヨリ筑前守文室善方大將ニテ。對馬之行  
向テ。二百餘人ヲ討殺シ。其船并武具等ヲ奪取  
十二月。僧益信聖寶共ニ法務ヲ掌ル。益信ハ仁和  
寺ニ居リ。聖寶ハ醍醐ニ居ル。皆真言宗ノ名アル  
僧ナリ。同月。渤海ノ使者裴文籍來ル。鴻臚館  
ニテ迎接アリ。是ハ元慶七年ニ來ル。裴邇ト同  
人ナリ。此人菅丞相ノ作レル詩ヲ見テ。大唐ノ  
白樂天ニ似タリト云リ

七年三月。神泉苑へ行幸。櫻花ヲ御覽。菅丞相  
等供奉。八月。左大臣源融薨ス。歳七十二。此人  
六條河原院ヲ作り庭ニ大ナル池ヲ掘。毎日數百人ノ  
人夫ヲシテ。攝津尼前ノ浦ヨリ。水ヲ運シ。毎月塩

三十石充其中へ入。陸奥國ノ鹽竈ニ似セラル。又魚鳥  
虫ヲカヒ草花等ヲウユルコト。ヤケテ計ヘカラス。河原  
左大臣ト號ス。十月。菅丞相中納言ニ任ス

八年正月六日。雲林院へ行幸。子日ノ遊アリ  
親王公卿供奉。七月。藤原良世左大臣トナル。源能  
有右大臣トナル。九月。一條后精和ノ后  
陽成ノ母東光寺僧善  
祐ト。密通ノコトヲラハレテ。后ハ位ヲスヘリ。善祐ハ伊豆  
へ流サル。后此時五十五歳。十二月。左大臣良世致  
仕ス。歳七十四。右大臣能有政ヲ執ル。能有ハ文德ノ  
皇子ニテ。弓馬ノ藝ニ達シタル人ナリ。源家ノ先祖兼  
純親王ハ此人ノ婿ナリ。弓馬ノ藝ヲ相傳ス  
九年六月。右大臣源能有薨ス。歳五十三。同月藤



原時平大納言ニ任シ左大將ヲ兼シ源光ト管相  
トフ權大納言トス管丞相公右大將ヲ兼テ時平ト同  
ク政ヲ執行フ大臣ヲハ闕テスニ々置ス 七月二日  
天位ヲ太子敦仁ニ讓テ朱雀院ニ遷居時歲三十  
又亭子院トモ申ス後ニ髮ヲ剃ユニ寛平法皇トモ  
申ス初即位ノ翌年年號改メ光孝仁和四年ヲ用  
ユ其後寛平年號九年合テ在位十年

六十代

醍醐天皇 宇多第一ノ皇子ナリ諱ハ敦仁母ハ藤原  
船子ト云中納言高藤ノ娘ナリ寛平五年ニ太子ト  
ナル九年七月二日元服歳十三同日ニ讓リヲウケ  
テ即位宇多ヲ太上天皇ト號ス太上ノ仰ヨリテ

大納言藤原時平ト管丞相ト時大納言相並テ政ヲ  
行フ其儀大臣ニ准ス時平時ニ歳二十七甚ワカクニ  
テ其上伯父國經ノ妻ヲ奪取テ世ノ譏リアリケレ  
トモ昭宣公ノ嫡男ニテ代々ノ執政ナルニ三リテ當  
今第一ノ臣ニ定ラル管丞相在五十四倭漢ノ才ヤ  
リテ事ニ馴タルニヨリテ儒家ヨリ登庸シ時平ニ副  
ニ當今幼少ノ中ハ何事モ此兩人ハカラヒナルベシト云  
昌泰元年二月天皇清涼殿ニテ群書治要ヲ讀タ  
ラシ紀長谷雄侍讀アリ 十月太上天皇大和攝  
津ニ御幸管丞相等供奉 十月朔旦冬至群臣賀  
シ奉ル朔旦冬至ニヤタル古ヨリ慶賀スルコトナリ  
二年正月二日太上天皇ノ下シテ朱雀院へ朝覲ノ



行幸アリ。二月藤原時平左大臣ニ任ズ左大將元  
ノコト。菅丞相右大臣ニ任ズ右大將元ノコト。源光藤  
原高藤大納言トナル光ハ仁明ノ子ナリ高藤ハ天皇  
ノ外祖ナリ。菅丞相儒家ヨリ起テ皇子外戚ノ上ニ  
在ル故ニ右大臣ヲ再ニ表ストイハトモ御許容ナシ  
九月柔子内親王伊勢齋宮トナル天皇出御アリテ  
其儀式アリ。中納言藤原國經ヲシテ齋宮ヲ送ル  
十月太上天皇。仁和寺ニライテ落飾益信戒師タ  
リ。法名ヲ金剛覺ト云。十一月東大寺ニテ灌頂シ  
太上天皇ノ尊號ヲ返シテ所々ノ名山巡見ル。良利  
トイヘル者タ。一人供奉常ニ其ヲハシテス所ヲルモノナ  
シ。天皇勅使ヲ遣シテ尋レトモ逢ス。程ヲ歴テ歸京。  
專佛道ニシテモムノニヨリテ。法皇ト申ス。是法皇ノ始

三年正月二日。天皇朱雀院へ朝覲シタ。菅丞相  
供奉詩ヲ獻シ。御衣ヲ賜ル。龍榮日々ニサカニナルニヨ  
リテ。時平ソ子トコ、ロアリ。或説ニ。此時菅丞相ヲ關  
白トセラレキト。密々ニ仰アリケレトモ。堅ク辭退シテモ  
其披露ナシトイヘリ。 同月高藤内大臣ニ任ズ。祖武  
ヨリ以來。此官中絶セリ。 三月高藤薨ス。歳六十三。  
太政大臣正一位ヲ贈ラル。 七月彗星見ユ。 十月  
三善清行トイヘル人。博學ニテ。算數ニ達シタル名人  
ナリ。此比文章博士ノ官ニテアリシ。其書狀ヲ菅丞  
相へ奉リ申ケル。明年ハ辛酉ニアタレリ。天道命ヲ



改ルノ運ニアタレリ君臣ノ寵辱儒家ニテ全吉備大  
臣ノ外公其例ナレ尤慎ミアルヘキコトナレハ官位ヲ辭退  
シタヘト申 同月法皇高野山へ御幸

延喜元年正月元日日饒二十十五日菅丞相ヲ太宰  
權帥ニ降シテ筑紫へ左遷セラル始メ宇多在位ノ時  
密ニ菅丞相ヲ召テ位ヲ當今ニユツルヘキコトヲ議セ  
ラル菅丞相ヲソカラザルコトナリハラタ時ヲ待タ  
ヘト止ム其後重ニ談合アリケレハ菅丞相急其沙  
汰然ヘレガヤウノコト其時節ノフレハ他ノサマタケアル  
モノナリト奏スヨレニヨリテ天皇即位ノ時菅丞相ハ  
當今ノ忠臣ナリト宇多法皇仰セララル時平年弱シ  
入皆菅丞相ヲ敬フ時平世スヨリノ源光藤原定國

藤原菅根ナリニ議シテ或ハ菅丞相ヲ調伏シ或ハヨ  
リノ讒言ヲ加ヘケルトソ天皇ノ弟ヲ齊世親王ト云  
菅丞相ノ婿ナリ故ニサキニ宇多ノ讓位ヲサヘトメ  
ラレケル齊世ヲ太子ニ立シトノタクニナリト時平奏  
聞セラレケルトナシ天皇今年十七ナレハ其實否ノ沙  
汰モナカリケルカ時平代々ノ執政ニテ威強テ專ニ執  
行ロケルトキコヘ源光ヲ菅丞相ニカヘテ右大臣トス  
法皇キコレメレテ菅丞相左遷ノ罪ヲ宥シトテ同晦日  
參内シタヘトモ勤番ノ士門ヲ開ス夜モスガヲ御門  
ニ立タメエトモ奏聞スル人モナケレハ明ル二月朔日法  
皇空ク還御同日菅丞相都ヲ出テ筑紫へ赴ク其子  
四人ハ皆流罪セラレ齊世親王落飾 八月時平及



大藏善行勅ヲ奉テ。清和陽成光孝ノ三代實錄五  
十卷ヲ撰テ奉ル善行ハ時平ノ師ニテ。今年七十二及  
ヘリ。十二月。法皇東寺ニテ灌頂シ。御室ヲ仁和寺  
ニ造ル是御室ノ始ナリ。後世ニ御門跡ト云コトモ是ヨリ  
起ル宇多法皇ノヲハニミス所ナレハ御門ノ跡ト云義ナ  
リ

二年三月。飛香舎ニテ藤原ノ宴アリ

三年二月二十五日。管丞相筑紫ニテ薨ス。年五十九。

四年二月。皇子保明ヲ立テ太子トス。時ニ二歳。母ハ

藤原穩子。時平ノ妹ナリ。

五年正月三日。仁和寺へ行幸。四日。時平館ニテ大饗

アリ。四月。紀貫之古今後歌集ヲ撰テ奉ル。九月。

法皇金峯山へ御幸。十一月。延喜格ヲ撰ス。

六年八月。天皇史記ヲ讀。七月。大納言右大將藤

原定國卒ス。天皇ノ外舅ナリ。九月。伊勢鈴鹿山ニ

群盜アリ。其張本十六人ヲ捕テ誅ス。十二月。日本紀

ヲ讀畢テ。官々ヲ設ケ。歌ヲヨシム。

七年十月。紀州熊野神ニ從一位ヲ授ラル。法皇熊野へ

御幸。

八年正月。渤海ノ使裴璆來朝。四月。歸國。

九年四月。左大臣藤原時平薨ス。歳三十九。正一位

大政大臣ヲ贈ラル。本院ノ大臣ト號ス。

十年。旱天變怪異等アリ。

十三年三月。右大臣源光薨ス。歳六十九。八月。大風



十四年正月京中ノ家六百餘焼亡 六月大水

七月大納言藤原忠平右大臣トナル時平ノ弟ナリ

十六年三月七日朱雀院行幸アリテ法皇ノ五十筭

ヲ賀シタラフ 五月七日貞純親王薨ス清和第六

ノ皇子源家ノ先祖桃園親王是ナリ 同二十一日風

雨烈シ中納言藤原定方藤原清貫賀茂川ノ堤ヲ

巡見ス 十七年大旱洛中池涸

二十年五月渤海使裴瓊又來朝ス王三位ヲ授ラレテ

歸國ス

二十一年十月少納言平惟扶ヲ勅使上シテ高野山

へ遣シ弘法ニ大師號ヲ贈ラル

二十二年早リ 延長元年三月太子保明薨ス文彦太子ト謚ス菅

丞相ノ怨惡ナリト云ニヨリテ其官位ヲ復ス

二年正月忠平ヲ左大臣ニ轉ジテ大納言藤原定方

ヲ右大臣トス定方ハ定國ガ弟ナリ 同月天皇四十

賀ヲ行ヒ

三年六月天皇痘瘡

四年十二月法皇六十筭ヲ賀セラレ

五年十一月左大臣忠平延喜式五十卷ヲ撰テ奉

ル 格式ハ嵯峨ノ時ニ始テ撰シ清和ノ時損益アリテ

此御代ニ全備ス六十六箇國ノ風土記モ元明ノ時ヨ

リ撰ルトイヘトモ代々校正シ此御代ニ成就セリ



十二月智證三大師號ヲ贈ラルル  
六年六月小野道風ヲ召テ漢朝ノ賢王名臣ノ徳  
行ヲ清涼殿ノ南庭ノ壁ニカ、シ令道風ハカクレテ  
書ナリ

七年八月洪水田畠流レ人多ク死ス 九月小野道風  
ヲシテ賢聖障子ノ繪ノ名ヲ書シム

八年六月二十六日愛宕ノ方ヨリ黒雲起リ俄ニ大  
キニ雷ナリテ清涼殿ノ上へ落テ大納言藤原清實  
右中辨平希世等侍臣數輩雷火ニテ焼死ス天皇火  
ヲ避テ常寧殿へ移リ夕ニ管丞相ノ怨靈ノナストコ  
ロニ世ニ云傳ヘタリイフカニ 九月二十二日天皇病  
ニヨリテ位ヲ御子寛明ニ讓ル同二十九日崩ス歳四

十六 年號昌泰三年 延喜二十二年 延長八

年在位合テ二十三年其年數久ヨリテ延喜帝ハ  
申スルヘ醜御寺ノ邊ニ葬ニヨリテ醜御天皇ト申ス

六十一代

朱雀院 醍醐第十一ノ子ナリ諱ハ寛明母ハ皇后藤  
原穩子ト云昭宣公ノ娘ト

延長三年十月三歳ニシテ太子トナル

同八年九月ニ讓リヲ受テ十一月即位時ニ八歳左大  
臣藤原忠平攝政

承平元年七月宇多法皇崩ス歳六十五

二年八月右大臣藤原定方薨ス歳六十五  
十一月大嘗會一代一度ノ太神寶ヲ伊勢及



諸社へ納ラル

三年正月洛中群盜起ル 二月大納言藤原仲平  
右大臣トナル忠平ノ兄ナリ 十二月殿上人十餘輩  
大原野ニ鷹狩其裝束羨ヲ盡セリ

四年山陽南海海賊起官兵ニ命シテ是ヲ捕ム  
五年唐ノ兵越ノ人蔣承勳來テ羊ヲ獻ス

六年三月飛香舎ニテ小弓結番アリ 六月南海  
海賊ノ張本藤原純友其徒黨ヲ聚メ伊豫國日振嶋  
ニ千餘艘ノ船ヲ聚メ海上往來ノ官物ヲ奪取コトヨリ  
テ紀淑人ヲ伊豫守トシテ遣サル淑人仁愛ヲ以テ  
ナツケレカハ海賊暫シツル 七月具越ノ蔣承勳  
太宰府ニ來ル 八月忠平書狀ヲ太唐具越王ニ遣

ス 同月忠平太政大臣ニ任ス 仲平左大臣ニ任ス 藤  
原恒佐右大臣ニ任ス

七年正月天皇元服歳十 忠平其事ヲ奉行ス 十  
二月陽成太上天皇七七賀ヲ行ル

天慶元年三月四日御前ニ鬮鷄十番アリ 四月  
十五日ヨリ二十九日ニ毎日大地震 五月右大臣  
恒佐薨ス 良世ガ子ナリ

二年正月忠平六十ノ賀アリ 四月出羽國ノ夷賊  
起ル 八月二十二日内裏ニテ夷申ノ遊アリ 十一  
月天皇史記ヲ讀藤原在衛等侍講 十二月平  
將門關東ニテ亂ヲ起シ常陸國へ攻入其伯父常陸  
大掾平國香ヲ殺シテ一國ヲ押領ス時ニ武藏權守



興世王ト云者將門ニ云ケル公ニ國ヲ掠ルモ坂東ヲ皆奪  
取モ其罪同シカルベシト云ケル將門ケニモト同心シ即チ  
兵ヲ率テ下野ヲ攻國司ヲ追出シ其ヨリ上野國へ移  
リ上総下総武藏相摸ヲ從ヘテ下総ノ國猿鳴郡石  
井郷ニ都ヲ立テ將門ハ桓武天皇五代ノ孫ナル公帝位  
ニ即トモナニ子細カアルベキトテ自ラ平親王ト號シ或  
ハ新皇トモ稱ス左右大臣以下百官ヲ置タ、曆博士ハ  
カリナシ心ノ一ニ賞罰ヲ行フ或ハ下総國相馬郡ニ  
王城ヲツクルトモ云リ此の時藤原純友海賊等ヲカ  
タラシ伊豫國ヨリ討ヒ備前ノ子高ヲ捕ヘ播磨ノ  
嶋田惟鶴ヲ生捕テ山海ヲ掠ス山陽山陰西海ヲ  
奪シトス始將門純友同時ニ在京ニ比叡山ニ登リ下平  
安城ヲ直下テ互ニ逆心ノ事ヲ相約シ本意ヲ遂ハ  
將門ハ王孫ナル公帝王トナル公純友ハ藤原氏ナル公關  
白タルシト云リトナル承平年中ヨリ將門ハ關東へ起キ  
純友ハ伊豫ニアリ少々蜂起シケルカ今年其約ヲ違  
ヘ東西ニ一度ニ起テ天下騷動洛中ニツカナラス此  
時源經基武藏ニ居レケルカ急キ上洛シ將門カ謀逆  
ノコトヲ言上ス其早く注進スルヨリニ任ヲ授ラル經  
基ハ貞純ノ子ナリ貞純ハ清和第六ノ皇子ナルコトヘ  
經基ヲ六孫王ト號ス始テ源姓ヲ賜ル多田満中ハ  
經基ノ子ナリ

三年正月將門純友降伏ノタメニ諸寺諸社へ祈念セ  
ラル二月參議右衛門督藤原忠文ヲ征夷大將軍



十。其弟藤原忠舒并源經基等ヲ副將軍トシテ關  
東へ遣サル。小野好古藤原慶幸大藏春實等ヲ將軍  
トシテ兵船二百餘艘ヲ率テ伊豫國へ發向ス。又東海  
東山兩道へ官符ヲ賜リ軍功マラハ賞ヲ行ルヘキヨシ  
相繼ラル。二月朔日下野押領使藤原秀郷常陸掾  
平貞盛陸奥下野ノ勢ヲ催一萬九千人ヲ率テ下野ノ  
國ニライテ將門ト合戰ス將門カ兵數百人討テ引  
退ク貞盛秀郷追懸テ十三日下總國ニ到ル將門嶋  
廣山ニ引籠ル貞盛火ヲ放テ將門并其從類ノ家ヲ  
燒十四日將門自出テ辛嶋ト云所ニテ戰テ貞盛カ  
放ツ矢將門ニテタリテ馬ヨリ落秀郷馳寄テ將門カ  
頸ヲ切シ同時ニ其從類百九十七人ヲ殺ス其タクハへ  
置ケル武具等收取將門カ兄弟數輩并其同類藤  
原玄茂興世王等皆所クニテ討テ又貞盛ハ國香カ子  
ナリ父ノ仇ナシ公殊ニ戰功ヲ獻ス秀郷ハ始ハ將門ニ從  
ントテ彼館ニ赴ク將門悅テ出迎テ秀郷其器量輕  
輕シクシテ本意懸マシキコトヲ見知テ遂ニ貞盛ト  
カラ合セテ功ヲ立タリ坂東既ニ治リケレハ三月九  
日秀郷ニ從四位下ヲ授ラル。下野武藏兩國ノ守ニ任  
セラル秀郷ハ世ニイハユル表藤太是ナリ其後秀郷貞盛  
鎮守府將軍タリ貞盛ヲ公從五位上ニ叙シテ右馬助  
ニ任ス。同二十五日將門カ頸京都ニ到ル。四月忠文等  
駿河國清見關ヨリ歸京スサレホトニ純友ハ伊豫讚  
岐阿波淡路ヲ掠メケルガ阿波ハ國風ト合戰ニ純友



利ヲ失テ引ノキ。其ヨリ又土佐國安藝國周防國等  
ヲ濫妨シ。直ニ太宰府ヘ赴キ。官物ヲ奪取ル。討手ノ大  
將小野好古等。純友ヲ追テ。太宰府ヘ赴ク。

四年五月。小野好古等。筑前博多津ニ。純友ト合戰。  
藤原慶幸。大藏春實。身命ヲ捨テ。相闘フニ。火ヲ放テ。  
賊船ヲ燒。六月。純友戰敗レテ。ツキレタカフ者。或降  
參シ。逃ウセシカ。純友小舟ニ乘テ。伊豫國ヘ逃歸ル。當  
國ノ警固ニ居ケル。橘遠保ト云者。純友并其子重太。凡  
ヲ討殺シテ。頸ヲ都ヘ送ル。或ハ純友生捕レテ。獄中ニ死  
タリトモ云リ。八月。小野好古歸洛ス。十一月。忠  
平攝政ヲ辭ス。勅レテ。關白トシ。萬機ノ政。先忠平ニ  
アツカリ。テ。後。奏聞スヘシ。昭宣公ノ例ノコトシ。十

二月。大赦ヲ行ル。東國西海兵亂レツ。ムルヨリ。テ。ナリ。  
五年三月。伊勢宇佐ヘ奉幣使ヲ立ラシ。始テ賀茂ヲ社  
ヘ行幸アリ。是兵亂レツ。ムルヨリ。

七年四月。藤原實賴。右大臣ニ任ス。忠平ノ嫡男ナリ。  
八年九月。左大臣藤原仲平薨ス。歳七十一。枇杷左  
大臣ト號ス。

九年四月。天皇位ヲ御弟成明ニ讓テ。朱雀院ニ遷  
居タス。太上天皇ノ尊號ヲ奉ル。年號承平七年。  
天慶九年。在位合十六年。

六十二代

村上天皇 醍醐第十四ノ子。朱雀同胞ノ弟ナリ。諱  
八成明。朱雀子ナキニヨリテ。成明ヲ太子トシ。位ヲ讓



八天慶九年四月二十八日即位時三十一歳ナリ  
天皇生ツキサカレシテ詩ヲモ歌ヲモ作りタマフ  
天曆元年正月四日朱雀院へ朝觀ノ行幸御母皇太  
后藤原子ト太上天皇ト二謁セラハル 四月藤原實賴左  
大臣三轉左大將ヲ兼シテ其弟師輔右大臣三任シテ  
右大將ヲ兼シテ父忠平既關白太政大臣タルコト  
年久シク二至三父子兄弟三二人同時二公タメニスク  
十キ繁榮ナリ忠平ハ小一條殿ト號ス實賴ハ小  
野宮殿ト號ス師輔ハ九條殿ト號ス師輔ノ娘安  
子天皇ノ后ナリ 六月參議藤原忠文卒ス歳七十  
五中納言ヲ贈ラル此人將門追討ノ大將トナリテ下  
向ス路次ヨリ歸テ戰功ナリトイヘトモ恩賞行レ然  
ルレト師輔申サルトイヘトモ實賴同心十キニヨリテ  
其沙汰ナレ故ニ忠文怒テ實賴ヲ恨ミ師輔ニ讓ルヘ  
シト云テ斷食シテ死ス其靈ニヨリテ實賴ノ子孫ハ衰  
ヘ師輔ノ子孫ハ繁昌ト申ツタユレトモ將門討レテ  
數年ヲ歷テ忠文七十餘ニテ死タケ世俗ノ云トコロ  
イフカレ 八月ヨリ以後天下癘癘ハヤリテ諸社へ  
奉幣又讀經拈念ヲ九 九月管丞相ノ廟ヲ北野ニ  
建 十一月宇治へ行幸遊獵  
二年夏大旱秋大雨 八月二十四日日月並見  
三年正月太政大臣忠平疾ニヨリテ致仕實賴師輔  
相並テ政ヲ行フ 八月十四日忠平薨ス歳七十正  
一位ヲ贈ラル信濃公ニ封ジ貞信公ト謚ス天納言



源清蔭等勅使トシテ。其葬所へ行向フ。攝政十二年。關白八年云。九月陽成太上天皇崩ス。歳八十一。十二月大江朝綱橘直幹菅原文時大江維時等ノ博士ニ命ジテ。詩ヲ撰シメ。小野道風ヲシテ。其詩ヲ屏風繪上ニ書シム。繪ハ巨勢公忠カ筆ナリ。

四年七月第二ノ皇子憲平ヲ太子トス

五年藤原伊尹ヲ倭歌所ノ別當トシテ源順大<sub>カ</sub>中臣能宣清原元輔紀時文坂上望城五人ニ命ジテ。梨壺ニライテ。後撰倭歌集ヲ依レ。順公詩文倭歌共ニス。クシテ。博學ノ人ナリ。

六年八月朱雀太上天皇崩ス。歳三十。嗣子憲平。七年三月大納言兼民部卿藤原元方卒ス。歳六十

六。此人ノ娘天皇ノ女御ナリテ。一ノ宮廣平ヲ産ジシ。カルニ二ノ宮憲平ハ師輔ノ外孫ナルニヨリテ。一ノ宮ヲコヘテ太子ニ立ラル。故ニ元方恨テ憂ニシツニテ死ス。其後程ナク。女御モ一ノ宮モ薨セラレ。太子憲平邪氣ノ病ニシカサル。元方カ怨靈ナリトイヘリ。

九年正月内裏ニテ法華講アリ。初テ公卿ヲシテ。布施ヲ引シム。三月北野天神詫宣ニテ。右近馬場ニ夜ニ千本ノ松生ストイヘリ。

天徳元年四月師輔五十。筭ヲ賀シタ。ヒテ。藤壺ニテ宴ヲ設テ。天盃ヲ師輔ニ賜ル。

二年三月實頼輦車ヲ許ル。十一月源經基卒ス。三年三月感神院上清水寺上。鬪亂ノコトアリ。檢非



遣使ヲ遣シテ。是ヲ治シム。感神院ハ祇園ナリ。同月。師輔春日へ參詣コレヨリ後藤原家大臣春日へ參詣ノコト多シ。春日ハ藤原氏ノ祖神ナリ。

四年五月四日。右大臣藤原師輔薨ス。歳五十三。生ツキ仁愛ニテ。喜モ怒モ色ニアラハサス。人皆惜ム。八月。藤原顯忠右大臣ニ任ズ。時平ノ子ナリ。九月内裏炎上。平安城へ都ヲ遷サレテヨリコノカタ。帝王十三代ヲ歴テ。始テ炎上セリ。古ヨリ傳レル御寶物モ。此時多ク焼失セリ。神鏡ハ温明殿ニアリシカ。自ラ飛出テ南殿ノ櫻ノ上ニカ、リシヲ内侍袖ニウケ奉ル。神鏡ヲ内侍所ト云。是ヨリ始ル。十一月。冷泉院ニ遷居タマフ。應和元年。十一月。冷泉院ヨリ。新造ノ内裏へ還幸。

二年二月。伊勢カ。賀茂松尾。平野春日ハ奉幣使ヲ立テル。賀茂松尾ハ神馬十疋ツ、進セラル。其外諸社へ奉幣使ヲ立ラル。

三年二月。太子紫宸殿ニテ元服。實賴加冠タリ。參議藤原朝忠理髮タリ。八月。實賴石清水ニ參詣。是ヨリ以後藤家ノ大臣。石清水詣ヲホシ。同月。叡山ノ良源南都ノ仲筭等ヲ召テ。清凉殿ニテ宗論セシム。康保元年四月。中宮藤原安子崩ス。中宮ノ妹ヲ登子ト云。天皇ノ兄重明親王ノ室ナリ。容貌ウルハレキニヨリテ。中宮へ參ラル。時天皇密通ス。此時重明モ既ニ薨シ。中宮モ崩スルニヨリテ。登子ヲ内裏へ召テ寵愛セラル。コレヨリ村上ノ朝政衰へヌ。



二年四月。右大臣藤原顯忠薨ス。歳六十八。十二  
月。天皇四十ノ筭ノ御賀アリ。

三年正月。源高明右大臣ニ任ス。是ハ延喜ノ皇子ナリ。  
八月。律師良源。天合座主トナル。慈惠僧正是ナリ。

四年五月二十五日。天皇崩ス。歳四十二。年號天  
曆十年。天德四年。應和二年。康保四年在位合  
テ二十一年。

六十三代

冷泉院 材上第二ノ皇子諱憲平。母ハ中宮安子ト云。  
右大臣師輔ノ娘ナリ。天曆四年五月ニ生テ。七月ニ太  
子トナル。康保四年二月ヨリ。邪氣ノ御病アリテ。心地  
常ナラス。五月村上崩ス。太子凝華舎ニテ踐柞。歳十

ハ。六月。藤原實頼ヲ闕白トス。十二日實頼ヲ太  
政大臣トス。源高明ヲ左大臣ニ轉シ。藤原師尹ヲ右大  
臣トス。師尹ハ實頼カ弟ナリ。天皇ノ弟ヲ爲平ト云。  
其弟ヲ守平ト云。爲平ハ村上ノ愛子ニテ。左大臣高  
明ノ婿ナリ。天皇即位以後モ。御病愈サルニヨリテ。爲  
平ヲ太子ニ立ラルヘキカト。人皆思ケルカ。實頼ト高明  
ト不和ナル故ニヤ。村上ノ遺勅ナリトテ。守平ヲ立テ  
東宮トス。

安和元年。天皇御惱レバク起ルニヨリテ。朝政多ハ實頼。  
高明。師尹執行。

二年二月。右大臣師尹カ家人ト中納言藤原兼家  
カ家人ト鬪亂シテ。師尹カ家人一人殺サル。師尹カ



家人數百人起テ兼家カ宅ヲウチ破ル兼家ハ師  
輔カ三男ニテ師尹カ姪ナリ 同年三月左馬助源  
滿仲武藏及藤原善時密ニ中務少輔源繁延謀叛  
ノ企アリ是ハ左大臣高明カハカラヒニ天皇ヲ推シ  
口シ爲平ヲ即位セシメントノコトナリト申スコレニヨリテ  
實賴師尹奏聞高明ヲ太宰ノ權師ニ左遷シ髮ヲ  
剃シメテ筑紫ヘ流罪ス師尹ヲ左大臣トス藤原在衡  
右大臣トシ檢非違使ヲ遣シテ繁延并僧蓮茂ヲ  
捕テ拷問シ白狀シケレハ藤原千晴モ同類ノキコヘア  
ルニヨリテ檢非違使源滿季 滿中ノ弟ヲ遣シ千晴并  
從兵ヲ捕テ禁獄ス禁中騷動ハナタシ 四月高明  
ノ西宮ノ家ヲ焼拂フ千晴繁延蓮茂皆流罪其同類  
ヲ國々ニテ捕ヘシム滿仲善時ニ賞ヲ行ル高明ハ傳  
ク日本ノ舊記并故實ニ通シタル人ナリ其書集タル  
記録ヲ西宮記ト云千晴ハ秀郷カ子ナリ或説ニハ高明  
逆心ナシ滿仲カ讒言ナリシヲ實賴真ニトリナシテ申  
シ行ヒケルトモ云 八月天皇不例ニヨリテ位ヲ御弟  
守平ニ讓テ冷泉院ニ遷居太上天皇ト號スコレヨ  
リ以後ノ天子皆院號アリ年號安和在位二年  
六十四代

六十四代

圓融院 村上第五ノ皇子ナリ諱ハ守平母ハ冷泉ニ同  
シ安和二年九月即位歳十一實賴攝政隨身兵仗等  
車ヲ聽サレ内覽ノ宣旨ヲ蒙ル 十月左大臣師尹薨  
ス 十二月實賴七十筭ヲ賀シタマフ



天祿元年正月。藤原在衛左大臣ニ補入藤原伊尹右大臣ニ任ス伊尹ハ師輔カ嫡男天皇ノ外舅ナリ在衛公元儒家ナリ村上ノ御時學問ヲ以テ家ヲヲコシ其娘女御ニ備テ寵アリレユヘ登庸セラレタリ吉備公菅丞相ノ外儒家ノ大臣ニ登ルハ在衛一人ナリ 五月攝政太政大臣藤原實賴薨ス歳七十一。正一位ヲ贈ラル尾張公ニ封シ清慎公ト謚ス右大臣伊尹攝政十月左大臣在衛薨ス。歳七十九 二年三月始テ石清水臨時祭ヲ行ル勅使右中將忠清等參向 十一月伊尹太政大臣ニ任ス源兼明ヲ左大臣トシ藤原賴忠ヲ右大臣トス兼明ハ延喜ノ皇子ナリ賴忠ハ實賴カ子ナリ

三年正月三日。天皇元服十四歳加冠ハ伊尹理髮ハ兼明ナリ 四月源高明子救レテ筑紫ヨリ歸洛 十一月伊尹薨ス。年四十九。正一位ヲ贈シ參河公ニ封シ謙徳公ト謚ス伊尹カ弟兼通ヲ内大臣ニ任シ關白タラシムユレヨリサキ兼通參議タリシ時其弟兼家中納言タリ兼通中納言タリシ時兼家ハ大納言タリ兼通兄ニテ弟ニ起ラレタルコトヲ憤ルニ至テ兼通大納言ヲ歷ス中納言ヨリ直ニ大臣關白タリ右大臣賴忠ハ從兄ナルユヘ政事ヲ相談シ兼家ヲ惡テコレノ害セシトス兼家カ宅へ出入スルモノヲハコレヲ叱ス 天延元年四月二十四日夜強盜源滿仲カ宅ヲ圍



テ火ヲ放ツ。是ヲ防クヨリテ。強盜ハ退散ス。類火ニ  
カ、ル家三百餘宇。強盜ヲ尋求ス。武士ヲ召テ内裏ヲ  
守レト。

二年二月兼通太政大臣トナリ。輦ニ乗テ參内  
十月高麗ヨリ馬ヲ獻ス

三年六月兼通以下。公卿祇園ノ社ニ奉幣舞樂。庖  
養御願ノ驗アリニヨリテナリ。八月選子内親王賀  
茂ノ齋院トナリ。惣ジテ伊勢齋宮賀茂齋院代カ  
クルコトナシ。選子村上ノ娘ナリ。今年天變多シ。或  
ハ彗星ニハク出

貞元元年五月十一日。内裏焼亡。六月ヨリ七月  
ニテ。度々大地震。京中洛外寺社人家多ク倒テ。人

多ク死ス。天皇モ中宮モ兼通カ堀川ノ館へ行幸  
兼通其館ヲ内裏ニゴトクニシツラヒテ。甚奢ル。又關院  
ノ館ヲ造テ。行幸ヲナシ奉ル。中宮ハ兼通カ娘ナリ

二年四月兼通カカラヒニテ。左大臣源兼明カ官職  
ヲ止テ。親王宣下セシメ。中務卿ニ任ス。賴忠ヲ左大臣  
ニ轉シ。源雅信ヲ右大臣トス。雅信ハ宇多天皇ノ孫ナ  
リ。兼明文才アリテ。詩賦ヲ作ル。延喜ノ子ニテ。今上ノ  
叔父ナシ。兼通コレヲ忌惡テ。大臣ノ權ヲウハハリ。兼明  
是ヨリ龜山ニカクレテ。年ヲ歴テ薨セリ。村上ノ御子。  
中務卿具平親王モ。詩文ニ達セリ。故ニ兼明ヲ前中  
書王ト稱シ。具平ヲ後中書王ト稱ス。七月天皇新  
造ノ内裏へ還幸。所々ノ額ハ藤原佐理是ヲ書佐



理公異朝一テミキユハタル能書ナリ 十月兼通疾  
ニヨリテ。關白ヲ頼忠ニ讓ル兼通奏シケル公弟兼家  
カ娘冷泉太上皇ニ寵愛セラレテ。子ヲ産故ニ帝位ヲ  
徳シトスルノ志アリト讒シテ兼家カ大納言右大  
將ノ官ヲ削テ。治部卿ニ降ス猶アキタラス死罪流罪  
カト奏シテトモ勅許ナレ 十一月八日兼通薨ス。  
歳五十一。遠江公ニ封シ忠義公ト謚ス

天元元年八月兼家娘詮子ヲ召テ梅壺ニ侍ラシメ。  
女御トスコレヨリサキ兼通カ娘中宮タリ故ニ兼通存  
生ノ内公他人ノ娘入内セス兼通薨スルニヨリテ詮子  
入内 程ナク皇子ヲ産ム 十月頼忠太政大臣  
トナル源雅信左大臣トナル兼家右大臣トナル

二年三月二十七日石清水八幡宮行幸此以後代  
代當社へ行幸アリ

三年二月頼忠ノ息公任清涼殿ニテ元服 十月十  
日賀茂ノ社へ行幸コレヨリ以後代代行幸アリ 十  
一月二十二日内裏炎上

四年二月二十日平野ノ社へ行幸 七月天皇不例  
叡山ノ慈惠僧正ヲ召テ加持シレアリトテ輦ニ  
乗テ宮中ニ出入スルコトヲユルサル大僧正ニ任セラル行  
基以後二百餘年大僧正ナレ 九月從三位菅原文  
時卒ス歳八十二菅丞相ノ孫ニテ文オスクレ村上  
ノ侍讀タリレナリ 十月新造ノ内裏へ遷幸  
五年正月叡山ニテ慈覺智證ノ兩門派相争テ騷



動ス。藏人平恒昌ヲ勅使トシテ登山コレヲシツル。慈  
惠ヲ召テ是ヲ止シム。九月。叡山僧齋然大宋國へ  
赴ク。十一月十七日。内裏回祿。天皇堀川院ニ遷ル。  
永觀元年二月。檢非違使ニ命ジテ。京中幾内ニタリ  
ニ弓箭兵仗ヲ帶スル者ヲ改捕シム。三月。圓融寺ヲ  
作テ洪養ス。叡山ノ慈惠。仁和寺ノ寛朝等僧綱皆  
參ル。

二年八月。天皇位ヲ御姪師貞ニ讓ル。太上天皇ノ尊  
號ヲ奉ル。四年。號天祿三年。天延三年。貞元二  
年。天元五年。永觀二年。在位合テ十五年。

六十五代

花山院。冷泉第一子。諱師貞。母八藤原懷子。攝政伊

尹ノ娘ナリ。圓融院ノ東宮トナリテ。永觀二年八月二  
十七日ニ讓リテウケテ即位。時十七歳。頼忠關白元ノ  
コトシ。此時ニ冷泉圓融皆存生ニテ。共ニ太上天皇ト稱  
ス。花山寺ニ入テ。花山院ト稱ス。  
寛和元年四月。藤原齊明其弟保輔ト惡黨ノ張本  
ニテ。藤原季孝大江匡衡ヲ刃傷シ。匡衡カ左手ノ指  
ヲ落サル。蘇丹明保輔行方シラス。逃亡ス。諸國へ下知ス。  
齊明ヲ近江高嶋郡ニ誅セラル。天皇即位ノニキリ。  
關白頼忠ノ娘ト。為平親王ノ娘ト。大納言藤原朝  
光カ娘ト。三人ヲ召テ女御トス。又大納言藤原為光  
カ娘恒子ヲ召テ。弘徽殿ニ置テ女御トス。甚寵愛セラ  
ル。サキノ三人ノ女御ハアトモナキカコトニ幾程ナク。



桓子病テ死ス。天皇ナケキカナシニテ、御在ノ病ヲウケテ世ヲ捨ルノ志アリ。御父冷泉上皇モ。此病アリニ猶イテダイエス。天皇又レカリテ近臣等コレヲイサムレトモ悲歎ヤス。同年八月ニ圓融太上天皇落飾ス。法皇ト稱ス。圓融院ニ遷リ居タマニ。

二年。天皇弘徽殿ノ女御ヲ慕テ出家ノ志イデキレカハ。六月二十二日ノ夜中。密々貞觀殿ノ小門ヨリシノビ出テ藏人藤原道兼ト。僧嚴久ハカリテ供ニテ。花山寺ニテモムキ落飾レ入覺ト號ス。御歲僅十九。人コレヲレロトナシ天文博士安倍晴明何心ニテテ庭ニ出テ天ヲ見テ天子位ヲサルキ天變ア田ト大ニ驚ニ急參内スレハ天皇ニレサス百官皆來テ尋又レトモ見ヘタハス夜アケテ處々ヲ尋未ケバ花山寺ニテ。天皇既ニ僧トナリタルヲ見テ皆驚ク。中納言藤原義懷左中辨藤原惟成常ニ近習シテルユ。同創ニ安ス。在位二年。年號寬和。

六十六代

一條院 圓融第一ノ子。諱ハ懷仁。母ハ梅壺女御藤原詮子。右大臣兼家娘ナリ。花山即位ノ時懷仁ヲ東宮トス。花山遁世ノ時兼家急キ參内レ東宮ヲ守立即位時ニ七歲兼家攝政ス。右大臣ヲ辭レテ其弟爲光ヲ右大臣トス。此時冷泉ヲ太上天皇ト稱ス。圓融花山皆共法皇ト稱ス。二人共ニ政ニカマハス何事モ皆兼家執行ス。



永延元年正月。有然宋ヨリ歸ル佛像一切經等ヲ持  
テ來ル。十月兼家カ東三條ノ館ヘ行幸。十一月右  
清水ヘ行幸。十二月加茂ヘ行幸。コレヲ兩社行幸ト  
云。

二年。六月強盜ノ張本藤原保輔ト云者。中納言藤  
原顯光カ家ニ籠居ル。官兵ヲ遣シテ此ヲ捕フ。保輔  
自害ス。八月兼家ニ條京極ノ宅ヲ作テ百官ヲ  
招テ遊宴ス。源賴光駒三十匹ヲ牽來ル。左右大臣  
以下。此ヲ配分ス。十一月兼家カ館ニ行幸。其六十ノ  
筭ヲ賀ス。家司二人任官。

永祿元年正月。圓融院ノ法皇ヘ朝觀ノ行幸。二月  
兼家嫡男道隆ヲ内大臣トシ左大將ヲ兼シム。三月。

春日行幸。六月。前關白藤原賴忠薨ス。歲六十六  
駿河公ニ封シテ廉義公ト謚ス。八月大風。宮城諸門  
其外神社多ク顛倒。十二月兼家太政大臣ニ任ス。  
正曆元年正月。天皇元服十一歲。五月兼家病ニ  
ヨリテ。髮ヲ剃テ東三條ノ大入道ト號ス。道隆ヲ攝  
政トシテ。兼家ニ代テ政ヲ行シム。七月二日。兼家薨  
ス。年六十二。病中出家スルニヨリテ謚ナシ。其館ヲ寺  
トシテ。法興院ト號ス。攝家ノ院號是ヲ始トス。  
二年二月。圓融法皇崩ス。歲三十二。九月。右大臣  
藤原爲光ヲ太政大臣トス。源重信ヲ右大臣トス。  
藤原道兼ヲ内大臣トス。重信ハ左大臣。雅信カ弟。道  
兼ハ道隆カ弟ナリ。十月。梅壺ノ皇太后。詮子。尼ト



ナル東三條院ト號ス。后ノ院號此ヨリ始テ女院ト稱ス。

三年六月太政大臣為光薨ス。歲五十一。相摸公ニ封シテ恒徳公ト謚ス。十二月源忠良ニ勅メ海賊ノ張本阿闍梨ヲ捕フ。

四年四月道隆攝政ヲ辭シテ關白トナル。五月菅丞相ニ太政大臣正一位ヲ贈ラル。勅使筑紫ノ安樂寺ヘ下向ス。七月左大臣源雅信薨ス。歲七十四。此人ノ嫡倫子ハ兼家ノ二男道長ニ嫁ス。

五年三月源滿政平惟時源頼親源頼信等ノ武士ヲレテ處々ヘ分遣シ群盜ヲ捕ム。七月源重信ヲ左大臣ニ轉シ道兼ヲ右大臣ニ上セ道隆カ長男伊

周ヲ内大臣トス。長徳元年正月女院ヘ朝覲ノ行幸。三日道隆病

ニヨリテ落飾奏聞シテ其子伊周ヲ假ノ關白トス。イクホトナク道隆薨ス。歲四十三。四月右大臣道兼

ヲ關白トス。伊周怒テ叔姪ノ間ツミシカラス。道兼ヲ調伏ス。五月七日左大臣源重信薨ス。歲七十四。

八月關白道兼薨ス。栗田關白ト云ハ是ナリ。十一日道兼カ弟左大將道長ヲ關白トス。道兼カ早世ヲ聞テ伊周ヨロコブ。已關白トシテ思所ニ女院ノ心ニヨリテ

道長任セラレケルハ彌不平ナリ。又道長ヲ調伏スレカトモ其驗ナシ。此時疫病ハヤリテ公卿以下多ク病死ス。七月道長右大臣トナル。此ヨリ道長朝政ヲホシイハ



二年正月花山ノ法皇畿内近國ヲ巡見シテ京へ皈  
 リ鷹野ノ四ノ君ト云ヘル女房ニ通ジツル四ノ君ノ婦ニ  
 ノ君ニ伊周密通ル法皇ニハク馬ニ乘テ四ノ君ヘカヨヒ  
 タラフヲ三ノ君ヘカヨフカト伊周疑テ弟中納言隆家  
 ト謀テ月ノ夜法皇ヲ子ヲヒテ矢ヲ射カクハ御腕  
 ニ中ル法皇驚クトイヘトモ此ヲ耻テ不言サレトモ其  
 事カクシテキニヨリニ四月伊周ヲ筑紫へ流ス隆家ヲ  
 出雲へ流スヘシトテ源頼光同頼親等ヲシテ禁中ヲ  
 守ラシメ檢非違使ヲシテ伊周隆家ガ宅ヲ圍メテ  
 其官位ヲテツリテ配所へ遣ス始道隆存生ノ時道  
 長ト不和ナリ道長能婦ノ女院へミヤツカヘ申スニヨ  
 リテ甚ハツニシ伊周ハ嬪流ナレトモ道長ニヨヘラフヲ巡  
 テ女院ヲモ調伏スル由其聞ヘアルニヨリテ花山法皇  
 フ射ケル罪科色々申メテ道長沙汰セリ 七月  
 道長左大臣トナル藤原顯光右大臣トナル兼道ガ子  
 ナリ

三年四月伊周隆家召歸サレ中官定子皇子ヲ誕  
 生スル故ナリ定子ハ伊周カ妹ナリ伊周流罪ヲ憤テ  
 髮ヲロシタラフサレトモ寵愛カハラストナシ 七月大  
 納言藤原公季内大臣トナル師輔カ末子道長カ叔  
 父ナリ 八月多田滿仲卒ス寛和ノ比ヨリ朝長ハ  
 攝州多田院ニ閑居セリ今年八十八トツキコエ其子  
 頼光頼親頼信武藝三達ニ朝家ノ守タリ



四年九月筑紫ノ海嶋ニテ南蠻人ヲ捕由太宰府ヨリ註進

長保元年三月關東ニテ下野守平維繼貞盛子平致

頼ト私ニ合戦スルヨリテ明法博士ヲシテ其罪ヲ論

セシム致頼流罪八月太宰府ヲシテ南蠻ノ海賊

ヲ討シ十一月道長カ娘彰子入内藤臺ノ女御

ト號ス其後中官定子崩ス彰子中宮トナル

三年五月疫病ハヤルヨリテ紫野ニ社ヲ立テ疫神ヲ

祭テ今宮ノ御靈ト號ス十一月内裏焼亡十二月

月東三條ノ女院詮子崩ス

四年三月僧寂昭大宋國ヘヲモムク此人ハ異朝ニ止

テ歸朝セス五月二十一社ノ奉幣使ヲ立ラル

五年十月新造ノ内裏ヘ還幸

寛弘元年十月始テ北野ノ社ニ行幸アリ

二年二月伊周ヲ赦シ參内セシム朝政ニ預レム

五年正月伊周ヲ大臣ニ准シテ封戸ヲ給フ此ノ儀

同三司ト云其儀三公ニ同ジト云義ナリ

二月花山法皇崩ス歳四十一

四月中宮彰子上東門院

ヘ遷居給フ是ニヨリテ東門院ト申ス式部此中

宮ニニヤツカヘ申セリ賀茂齋院選子内親王ヨリ上

東門院ヘメツラシキ草子ヲ所望セララルニヨリテ式部ニ

源氏物語ヲ作ラシメテ齋院ヘ進セララルト云傳タリ

六年七月一品中務卿具平親王薨ス歳四十六

十二月參議菅原賴正卒ス歳八十五此人ハ家業



ヲ繼テ。博學ナリ。死シテ後ニ北野ノ末社ニ祭ル

七年正月伊周薨ス歳三十七

八年六月十三日。天皇病ニヨリテ位ヲ東宮<sup>皇</sup>居貞親

王ニ讓リテ。二十二日崩ス。歳三十二。年號永延

二年。永祚一年。正曆五年。長徳四年。長保

五年。寛弘八年在位合テ二十五年

六十七代

三條院。冷泉院第二ノ子。諱ハ<sup>皇</sup>居貞母ハ皇太后藤

原超子ト云。攝政兼家ガ娘ナリ。一條即位ノ時。居貞

ヲ東宮トス。寛弘八年六月讓ヲ受テ即位。歳三十

六。道長朝政ヲ執リ前ノコトニ。十月冷泉太上天

皇崩ス。歳六十二

長和元年正月。道長娘妍子ヲ中宮トス。三月二

十一社ニ奉幣。五穀ヲ祈ル

二年九月。道長カ館ニ行幸。十一月。石清水ヘ行幸

十二月。賀茂行幸。此ヨリ以後代々兩社行幸

アリ。同月。中宮少進藤原雅信ト云者同

所ノ土<sup>ヒラヒ</sup>藤原惟兼ニ殺サル。道長怒テ。惟兼ヲカラヌ

テ禁獄ス

三年二月九日。内裏焼亡。五月。道長ノ館ニ行幸。

競馬騎射等ノ御遊アリ。六月。叡山惠心院僧都

源信寂ス

四年九月。内裏造畢。十月。道長五十ノ筭ヲ賀セ

テ。十一月。内裏又炎上



五年正月天皇御目クラキ疾アリテ位ヲ東宮敦  
成ニ讓ル。太上天皇ノ尊號ヲ奉ル。在位五年。年  
號ハ長和

六十八代

後一條院 一條院ノ子ナリ。諱ハ敦成。母ハ中宮藤原

彰子上東門院ノ娘ナリ。三條院即位

ノ時。敦成東宮トナル。長和五年正月ニ讓ヲ受テ。

即位。九歳ナリ。外祖道長攝政。其儀忠仁公ノ例ノ

如シ。三條ノ皇子敦明ヲ東宮トセラル。

寛仁元年正月二十二日夜強盜内裏へ入ル。瀧口ノ

内舎人藤原長輔ト道長ノ隨身藤原良孝ト出向

テ。此ヲ射殺ス。一人ニ賞ヲ行ハル。二月。道長左大臣

ヲ辭シテ。右大臣顯光ヲ左大臣ニ轉シ。内大臣公季

ヲ右大臣トシ。道長ノ嫡男大納言頼通ヲ内大臣ト

ス。道長又攝政ヲ頼通ニ讓ル。頼通時三十六歳。頼

通ノ弟中納言教通左大將トナル。五月三日道長

校敷ヲ一條ノ町ニカケ、ヘテ三千餘人ニ施行ス。同

月九日。三條院太上天皇崩ス。歳四十二。六月二

十七日盜道長ノ庫へ入テ沙金千三百餘兩ヲヌス。三

テ逃走ル。月ヲ歴テ。播磨國ニテ。件ノ盜ヲ捕タリ

八月。東宮敦明親王。邪氣ニヨリテ。自ラ位ヲ退テ。小

一條院ト號シ。太上天皇ニ准ス。御弟敦良ヲ東宮ト

ス。此モ道長父子ノハカラヒタルヘシ。冷泉圓融ノ兩流

カハルク在位ナリシカゴ、ニ至テ冷泉ノ皇統ハ絶タ



リ 九月道長石清水ニ參詣公卿以下相從ニ遊女  
等出迎フ淀川ヲ渡ル時舟五十餘艘アリ其内一艘乘  
沉テ死スル者二十餘人 十二月道長太政大臣ニ  
任ス攝政頼通勅使タリ

二年正月三日天皇元服道長加冠頼通理髮タリ  
三月道長ノ娘威子入内女御トナル其後中宮トナル  
十月道長カ館へ行幸

三年三月道長落飾歳五十四世ノ入是ヲ入道殿ト  
云他人剃髮スル者ハカリテ入道ト云ハス 四月日  
異國ノ海賊五十餘艘壹岐嶋へ亂入テ嶋守藤原理  
忠ヲ害スル由太宰府ヨリ申ニヨリテ宰府ノ官兵ヲ以  
テ賊ヲ平ケレム 九月道長東大寺ニテ受戒ニ 十

一月ニ又叡山ニテ受戒 十二月頼通攝政ヲ止テ  
關白トナル

四年二月道長法成寺ヲ作り新ニ堂ヲ作テ無量  
壽院ト號ス丈六ノ阿彌陀九體ヲ安置ス其外ノ  
佛像モ多シ 七月大風殿門多ク損ス

治安元年五月左大臣藤原顯光薨ス歳七十八  
七月右大臣公季ヲ太政大臣トス關白内大臣頼  
通左大臣トナル藤原實資右大臣トナル藤原教通  
内大臣トナル 十月春日へ行幸

二年七月道長法成寺ノ金堂ヲ作テ供養ス天皇行  
幸アリ太政大臣公季以下皆參詣御齊會ニ准セ  
ラル太皇太后彰子皇太皇后妍子中宮威子皆行



啓アリ。此三后ハ皆道長ノ娘ナリ。此御堂ヲ作ニヨリテ  
道長ヲ御堂ノ關白ト號ス。萬壽元年三月京中強盜  
多シ。檢非違使此ヲ捕フ。九月。頼通カ鑿鑿ヘ行幸  
十二月。大納言藤原公任致仕ス。頼忠ノ子詩歌管絃  
ノ達者ナリ。倭漢朗詠ハ此人ノ撰ナリ。

二年八月尚侍藤原嬉子ハ道長第三ノ娘ナリ。東宮  
敦良ヘ參リテ寵セラレ。皇子ヲ誕生。三日ヲ歷テ卒ス。  
歳十九。一條院ノ御時ヨリ以來。道長吉事ノ三ウチウチ  
ツキレガコ、ニイタリテ憂ニアレリ。嬉子ニ正一位ヲ贈  
ラル。

四年正月。上東門院ヘ行幸アリ。九月。皇太后妍子  
崩ス。道長ノ娘。三條院ノ后ナリ。時ニ歳三十四。十一

月。道長病アリ。上東門院モ。中宮モ。様々ノ祈念アリ。  
二十六日。法成寺ヘ行幸アリ。道長ノ病ヲ訪ヒ給  
フ。十二月朔日。道長薨ス。歳六十二。三代ノ間。攝  
政關白ニテ。天下ヲ下知スル。三十餘年。一條。三條。當  
今。東宮皆其壻ナリ。男子ハ皆攝關大臣。卿相トナル。  
攝家ノ繁昌。此ニ極レリ。赤染衛門ガ作リレ物語四十  
卷ハ大半道長榮花ノ事ヲ記セリ。同月四日。大  
納言藤原行成卒ス。歳五十六。能書ノ人也。世尊寺  
ノ家ノ祖ニテ。代々能書ヲホシ。  
長元元年四月。肥後守高階成章。藤原時速。平爲行  
等。私ニ合戰セントス。其罪科ヲ定ラル。六月。前上総  
公平忠常。下総ノ國ニテ亂ヲ起ス。右大臣實資奉リ



テ檢非違使平直方。中原成道ヲ遣シ。東海東山ノ  
兵ヲ遣テコレヲ討シム

二年五月。關白賴通。白川別業へ大臣以下ヲ招。競馬  
舞樂アリ。道長薨レテ後。賴通相繼テ。政ヲホシヒニ、  
ニス。十月。太政大臣藤原公季薨ス。歳七十二。甲斐  
公ニ封レテ。仁義公ト謚ス。此以後謚號ノ沙汰ナシ。君  
臣共ニ院號アルニナリ。公季ヲ閑院大臣ト號ス。其  
子孫清華ニ流アリ。三條西園寺徳大寺是ナリ。十  
二月。檢非違使中原成通。召歸サル。忠常ヲ討テ功ナ  
キニナリ。

三年三月。安房守藤原光業。國ヲ捨テ上洛。忠常ヲ  
懼テナリ。平政輔ヲ安房守ニ任セラル。九月。忠常

兵威強クシテ。平直方モ功ナキニヨリテ。召歸サル。甲斐  
守源賴信ニ命ジテ。坂東ノ軍勢ヲ集テ。忠常ヲ討シ  
ム

四年四月。賴信兵ヲ率テ。忠常カ城ヲ攻。其城海邊  
ナルユ。忠常兼テ下知シテ。船ヲ悉トリカクシケレ。賴  
信濟ルベキヤウナレ。カレトモ。賴信知勇カ子ソナヘタル  
ユ。淺瀬ナルベキ所ヲ推量テ。馬ヲ海ヘウチ入ケレ。士  
卒ノ中ニ淺瀬ノ案内ヲレリタル者アリケレトモ。始  
ハ黙シテイハサリケルカ。大將ノイサメル勢ヲ見テ。且淺  
瀬ヲ導クニヨリテ。軍勢皆馬ニテ海ヲ涉ル。忠常見  
テ其威ニヲソレ。叶フニキコトヲサトリテ。降參ス。賴  
信即チ忠常ヲ召具シ上洛ス。義濃國ニテ忠常病死



ス其頸ヲ斬テ京ニ送り獄門ニ曝ス。十月上東門院八幡住吉參詣

六年十一月從一位源倫子七十ノ賀アリコレハ道長ノ室ニテ上東門院中宮頼通等ノ母ナレハ天皇ノ外祖母ナラハ姑ナリ

七年九月大中臣輔親勅使トシテ伊勢へ參宮松實ノ中ニテ青玉ヲ得テ歸京シテ奉ル

八年六月賀茂齋院選子内親王薨ス歳七十二。上東門院ト甚睦シ

九年四月十七日天皇崩ス歳二十九中納言源顯基近臣ナルヨリテ追慕シテ大原ニテ出家ス。同年九月ニ中宮威子モ崩ス。年號寬仁四年。治安

三年 萬壽四年 長元九年 合テ在位二十年

六十九代

後朱雀院 一條ノ子諱ハ敦良母ハ上東門院ニテ。

後一條院ト同腹ナリ。寬仁元年東宮トナル。長元

九年七月二十八歳ニテ即位。外舅左大臣頼通相

替ラス關白トナリテ。政ヲ執ル

長曆元年正月頼通娘姫子ヲ女御トス。天皇東宮

ニナリシ時。道長ノ娘嬉子參テ皇子親仁ヲ生テ。

嬉子卒ス。其後二三條院ノ娘禎子内親王ヲ御息

所トシ皇子尊仁ヲ生リ。姫子ハ天皇ノ兄敦康親

王ノ娘ナリシヲ。頼通養テ入内セシメ。三月中

宮ニ立ラル



二年正月。上東門院へ朝覲ノ行幸 同年ノ冬。三井寺ノ明尊僧正ヲ天台座主トス

三年二月。叡山ノ衆徒等狀ヲ頼通ニ捧テ。明尊ハ智證ノ門流ナリ。慈覺ノ派ニテラザレハ座主ニ任セス

ト訴フ頼通何ノ門流ニテモ其人ニヨルベト云。山徒怒テ。大勢ニテ頼通ノ館ニ來テ。嗽訴シテ。門柱ヲ打破ル

頼通怒テ。平直方ヲシテ。山徒ヲ防シム。互ニ相戰死傷ノ者多シ。山徒ノ張本定勢ヲ捕テ禁獄ス 五月。上

東門院落飾。明尊戒師タリ 同八月二十二日。十二社奉幣ノ勅使ヲ定メラル。十二社トハ伊勢。

石清水。下上賀茂。松尾。平野。稻荷。春日。大原野。大神。石上。大和。廣瀨。龍田。梅宮。吉田。廣田。祇園。北野。舟生。

貴布禰ナリ。毎年其社々ノ氏子ヲ勅使トシ奉幣セ

フル 長久元年九月。内裏炎上。神鏡燒クシカレトモ。猶光ヲ

現スニヨリテ。其灰ヲアツメテ安置ス。天皇ハ東北院へ遷リタマフ。此院ハ上東門院ノ造ルトコロ。法成寺ノ傍ニアリ

二年三月四日。花宴アリ。文人詩ヲ獻シ。其オヲ試

ラル。此ハ異朝ノ及第ニ准シテ。嵯峨淳和ノ比ヨリ。毎年行。此時ニテモ絶ストナン

三年三月。大納言源師房娘女御トナル。師房ハ村上ノ孫。具平ノ子。道長ノ婿ナリ。此家ヲ村上源氏ト號シテ。清華ノ族ナリ。今ノ久我中院等ノ祖ナリ



四年夏旱ス。僧ニ毎雨ヲ祈テ驗アリトテ輦ヲ許サ  
ル。寬徳元年十月。上東門院不例ナリケレバ。萬人ノ僧  
ヲ聚。供養セラル

二年正月十八日。天皇崩ス年二十七。生レツキサカシク  
一ニセトモ政務ハ皆頼通沙汰シケレバ。御心ノマナラ  
ズ。年號長曆三年。長久四年。寬徳二年。合テ  
在位九年

七十年代

後冷泉院。後朱雀ノ長子。諱ハ親仁。母ハ藤原嬉子。  
道長ノ娘ナリ。後朱雀即位ノ時。親仁ヲ太子トス。  
寬徳二年四月二即位。御歳二十一。頼通開白元ノ

ゴトシ

永承元年正月。右大臣藤原實資薨ス。歳九十。實頼  
ノ孫ナリ。小野ノ右大臣ト號ス。此人ノ作レル記録ヲ  
小右記ト號ス。七月後一條ノ皇女章子ヲ中宮ト  
ス

二年八月。教通内大臣ヨリ右大臣ニ轉ジ。大納言頼  
宗内大臣トナル。皆頼通ガ弟ナリ

四年十一月。殿上ノ歌合アリ。コレハ村上ノ御時ヨリ。  
代々興行セラル。コトナリ。十二月春日行幸。諸國  
ノ神社。佛舍利ヲ一粒ツ、納ラル

五年十月。祖母上東門院へ行幸。十一月。頼通ノ  
娘寬子ヲ皇后トス。中宮トハ同シヤウノコトナレド



壬光仁ノ時ヨリ。中宮皇后並立ラレ、先例多シ  
六年頼通宇治ノ平等院ヲ建ツ 今年奥州ノ夷  
賊安倍頼時ト云フ者亂ヲ起シ國中ヲ掠ルニヨリテ  
源頼義ヲ陸奥守トシ鎮守府ノ將軍ヲ兼ヒシテ東  
征セシム頼義ハ滿仲ノ孫頼信ノ子ナリ。頼信ノ忠  
常ヲ討シ時ヨリ頼義既ニ軍功アルニヨリテ關東ノ  
武士皆是ヲヲモニス。頼義奥州へ入レカバ頼時ヲソ  
レテ降參シ國中早クシヅムルトコロニ頼時ガ子貞任  
法ニ背ニヨリテ罪ニ行ントス。頼時怒テ貞任相共ニ  
衣河ノ館ニ引籠テ。頼義ニ從ハスヨレニヨリテ軍勢十  
萬ヲ聚。衣河ヲ攻圍テ合戦止コトナシ。貞任ハ十  
七年十一月松尾平野へ行幸。此兩社ヘモ行幸ノ先例

多シ

天喜元年六月。頼通母源倫子薨ス。歳九十。天皇ノ  
曾祖母ナリ

五年九月。頼義奥州ニテ。安倍頼時ト合戦ス。頼時  
矢ニアタリテ死ス。貞任殘黨ヲ聚テ河崎ノ柵ニタテ  
コモル。或ハ河堰城トモ云リ 十一月。頼義千百餘人ヲ  
率テ貞任ヲ攻ム。貞任四千入ヲ。率テ防キ戦フ。折  
節風雪烈ク。官軍兵糧竭テ。大ニ破レテ。死ル者數百  
人。頼義其嫡男義家。即從藤原景通大宅。光任清原  
貞廣。藤原範季。藤原則明ト。ソツカ七騎ニウチナサレ。  
大敵ニ圍ル。義家時ニ二十歳許。強弓精兵ニテ。敵ヲ射  
殺コト甚多。光任等命ヲ輕ジテ防キ戦フ。敵戰勞レ



テ引退ク。賴義父子ニヌカレテ。國府ニ歸ル。此時敵義  
家人武勇ヲ畏テ々々人ナラズ。八幡太郎ト申スヘシ  
トイヘリ。コレヨリ義家ヲハ八幡太郎ト號ス。一説ニハ  
石清水八幡宮ニテ元服スルヨリ。テ其稱號トス。トイ  
ヘリ。十二月。賴義出羽國司源齊賴等以下諸國ヘ  
觸テ。軍勢ヲ招トイヘトモ。兵糧之キニヨリテ來ル者  
ナシ。故ニ貞任イヨク逆威ヲ振テ。官物ヲ押領ス。或  
說ニ齊賴ハ鷹島飼ナリ。賴義ニ從テ奥州ニアリトイ  
ヘリ。

康平元年八月。大極殿炎上

三年七月。關白賴通左大臣ヲ辭シテ。教通ヲ左大  
臣トシ。賴宗ヲ右大臣トシ。賴通ガ長男大納言師實

ヲ内大臣トス。父子兄弟四人。任權ノニナラス。此時  
當官ノ大納言四人ノ内。能信長家ハ賴通ガ弟ナ  
リ。源師房ハ妹婿ナリ。信家ハ賴通ガ姪ニテ。教通ガ  
子ナリ。

四年十一月。賴通七十ノ筭ヲ賀ス。十二月。賴通  
大政大臣ニ任ズ。七月。石清水賀茂行幸。

五年春。源賴義陸奥國司ノ任終ルニヨリテ。高階經  
重ヲ國司ニ任セラレ下向スト云トモ。貞任ガ勢ニラソ  
レソノウヘ國中ノ兵皆賴義ニシタガフニヨリテ。經重  
飯浴ス。同年ノ七月。出羽國仙北ノ住人清原武  
則ニ萬人ノ兵ヲアツメテ。賴義ヘ加勢シケレハ。賴義コ  
レニカラ得テ。八月出陣シ。貞任カ叔父僧良照ガ



コモリシ小松ノ柵ヲ攻破ル貞任ガ弟宗任來テ合  
戰ス賴義ノ即從等ヨク戰シカハ宗任敗テ引退ク  
九月五日貞任自ラ八千餘人ヲ率テ來ル武則コ  
ヲ見テ彼力城ヲ出テ戰コトハ味方ノ勝利ナリト  
云賴義ケニモナリト武則ト相共ニ諸軍ヲハケニ  
合戰ス午ノ刻ヨリ酉ノ刻ニ義家及其弟義細  
イサニスニテ攻ケレバ貞任戰一ケニ磐井河ニテ  
引退ク官軍ツキテ攻ケレバ貞任衣河館へ逃入  
ル六日賴義衣河關ヲ打破ル貞任鳥海柵へカクル  
十一日官軍鳥海ヲ攻貞任ガ兵處大ニテ多ク討  
テ厨川柵ニモル十四日厨川へ押寄十六日終日終  
夜相戰テ寄手モ城中モ討ルモノ多シ十七日貞任

城ヲ出テ自ラ拒戰ス官兵鋒ヲ以テ貞任ヲツキ  
タラシ楯ニノセテ賴義ノ前ニ至ル其長六尺アリ  
腰ノフトサ七尺四寸ノ大男ナルユヘ六人ニテコ  
昇出タリ貞任遂ニ死ス歳三十四其子千世童子  
十三歳城ヲ出テ合戰ス賴義其勇ヲ感シテユルサ  
ト云ケルヲ武則スメテコロサシメ貞任カ弟重任家任  
并ニ其黨藤原經清等皆斬殺サル宗任并ニ其弟則任  
叔父爲元等降參シテ國中悉ク平ク永承六年ヨ  
リ康平五年ニテ十二年ノ間合戰ノタヒコトニ義家  
武勇拔群ナルヨリテ武則ヲ始テ東國武士皆畏テ  
服ス

六年二月賴義ノ使者上洛シ貞任家任經清カ首



ヲ獻ル。京中貴賤群聚シテゴトヲ見ル。賴義正四位下  
ニ叙シ。伊豫守ニ任セラル。義家ハ從五位下。出羽守ニ  
叙任セラル。義綱ハ左衛門尉ニナサル。武則ハ從五位下  
ニ叙シ。鎮守府將軍ニ任セラル。使者藤原季俊。物部  
長賴ニモ賞ヲ行ハル。

七年十月東北院へ行幸アリ。祖母上東門院へ謁セ  
ラル。

治曆元年二月堀川右大臣藤原賴宗薨ス。歳七十  
三。六月藤原師實右大臣ニナリ。源師房内大臣ト  
ナル。九月宸筆金字ノ法華八講行ル。十日法成  
寺造替供養ノ日行幸。

三年十月十五日。賴通ガ申請ニヨリテ。皇治平等院

へ行幸。詩歌管絃船遊等ヲモヨホス。其經營ノ具ハ  
金銀珠玉ヲ以テカサレリ。賴通准三后ノ宣旨ヲ奉  
奉。十七日ニ還幸。賴通年スデニ七十三。ルユ。此所ニ  
山莊ヲカケ。常ニ住ケルユ。皇治關白ト號ス。關白ヲ  
上表スト云トモ。勅許ナキユ。皇治三居トイヘトモ。朝務  
太卜トナク。ツツカリ沙汰セリ。

四年正月元日。日蝕シケレバ。先例ニヨリテ。御殿ニ簾ヲ  
垂テ。朝拜ノ禮行ハズ。四月十九日。天皇崩ス。歳四  
十四。年號永承七年。天喜五年。康平七年。

治曆四年。合在位二十二年。



